日刊 動労千葉

81.10.31

No.883

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二-一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四三（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

軍事大国化・35万人体制攻撃の尖兵 =「本部」反動分子=土屋・嶋田一派を一掃せよ

当面する交渉事案の問題点とわれわれの任務について

「交渉ニュース第一号」で詳細報告の通り、動労千葉は、第六回定期大会決定に踏まえた要求事項をまとめ、「申一号」をもって対当局交渉を推し進めている。81年度新賃金配分をはじめとする当面の交渉事案の問題点について明らかにする。同時に、一層激しさを加える三五万人体制合理化攻撃、および、新マル生攻撃の前に、「本部」反動分子＝土屋粋一派と革マル分子＝嶋田、齊藤らが卒先してその水先案内人をつとめている事を怒りを込めて弾劾し、全職場から粉砕・一掃していかなければならない。

軍事大国化攻撃の一環、仲裁々定引のばし攻撃

「交渉ニュース第二号」で明らかにした通り81年度新賃金について、当局は、10月29日10時第一回配分交渉の中で、動労千葉の「申八号」にもとづく追及に対し、「組合の要求趣旨は承った」「速やかに精算できるよう今後精力的に交渉を詰めてゆきたい」との回答を行ってきた。

81春闘惨敗という状況の中で、政府・国鉄当局は、81年度新賃金引き上げ＝仲裁々定実施を今日まで不当に引きのばしてきたばかりか、これを人質として次々と反動的な「行革」法案の強行＝既得権の全面掘り崩しを強行してきた。

この仲裁々定問題が明確に軍事大国化－「行革」攻撃の一環であり、さらに右翼的労戦「統一」攻撃と連動した公労協・公務員共闘の分断、総評解体－春闘解体攻撃としてかけられていることをしっかりと見すえなければならない。

今や賃金闘争一つをとってみても、政府・支配階級との基本政策をめぐる全面対決を通してしか勝ちとれない時代に突入している。われわれは、「三里塚二期攻撃粉砕を突破口として、軍事大国化・右翼労戦『統一』攻撃をうち破り、労働運動の戦闘的再編を勝ちとる」という基本方針にしっかりと踏まえて、今秋－年末－来春闘期に至る闘いを積み上げていかねばならない。

「35万人体制」を上まわる合理化攻撃の加速

10月27日、国鉄当局は新聞発表を行ない、来年11月の東北・上越新幹線開業を中心とする「57・11ダイ改」における、すさまじい大合理化攻撃を明らかにした。

新幹線開業に伴う関連在来線区の特急、急行列車の大巾廃止（乗務員の大削減・運用大合理化を必然的にもたらし、また実質的な運賃値上げの強制……等）の攻撃は既に、関連全地本の労働者を深刻に直撃し始めている。と、同時に、「武操型貨物合理化」の一層の進ちょくを骨子とするこの「57・11」攻撃では、貨物輸送の設定キロは41万キロから更に削減され37万キロにまでされようとしている。

35万人体制合理化の途上においてすら既に深刻な労働強化・安全無視が襲いかかってきているというのに、「再建法に基づく経営改善計画」の内容によっても明らかなように、更に「国鉄職員を20万人台に削減」などという攻撃のエスカレートが画策されているのである。ここまで国鉄労働者をナメ切った攻撃のエスカレートを断じて許す事はできない！　国労、動労中央の合理化屈服＝協力の基本姿勢を見すかしての当局の意図は明らかである。とりわけ、「武操」に卒先協力し、「安定宣言」路線を強行し、「乗務員運用合理化」を卒先強行し、東北・上越新幹線に伴う大合理化との闘いをことごとく禁圧した上に「本部」革マル反動分子のセクト的利益をのみ追い求めるという「本部」反動分子の対応が、今日の攻撃の一層のエスカレートを呼び込んでいる事は、もはや明らかである。

千葉管内の職場を売り渡す、「本部」反動分子＝土屋一派と革マル・嶋田

われわれは、このような合理化攻撃の強まりの中で、賃金差別を始めとする陰質なマル生型労務政策による職場・生産点での労働運動解体攻撃が熾烈化する事を、歴史の教訓に踏まえて、しっかりと見すえなければならない。

既に、当局は「号俸の中抜き」を提起していること、更には革マル＝嶋田・齊藤を尖兵とする津田沼電車区における「職場規律の厳正」攻撃を見ても明らかである。同時に、千葉内の裏切者＝土屋粋一派が、「千葉局の合理化を推進し、革マルだけがセクト的に生き残る」事のみを追求する三信ビルの革マル＝竹内・山崎・村上らに〝千葉地本交渉〟をまかせっ切りにする事によって、今日、千葉管内の動力車職場を次々と売り渡していっている実体を徹底的にあばき、弾劾・一掃していかなければならない。

以上の認識に踏まえ、職場闘争の強化と結合して、交渉の強化をかちとってゆく決意である。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！